

## 7. 富田の水田開発

南部の水田は前野と呼ばれ、現在の富田団地まで富田の地主の田でした。今でも富田の方の田畑が多くあります。

北の台地には五社野の田畑（安威川水系で五社水路整備で開発された）が、多くありました。

五社水路は、安威川の一の堰から取水し太田・宮田・赤大路を経て西五百住・富田に至る水路です。

柳川地区は、高槻市の南西部に位置し、茨木市との市境のエリアです。

柳行李（やなぎこうり）の材料になる「コリヤナギ」の産地だったので「柳川」という川の名前や地名がつけましたが、今では柳はなく、桜の木が並んでいます。

高槻市の人口急増期に水田が新興住宅地になり、同世代の子育て世帯が多い地域となりました。平坦地ですので、自転車での移動もスムーズです。阪急総持寺駅、阪急富田駅まで徒歩 20 分ほどで、駅周辺に買い物施設がありますが、府道 133 号線にも買い物施設が多く並んでいます。

茨木市白川辺りは、昔「三島村」と呼ばれていました。この村の集落では農業の傍ら、副業として柳行李を作っている人がたくさんいました。

柳行李の歴史はとても古く、約 1200 年前には作られていました。奈良の正倉院御物には、現在とほとんど変わらない形の行李が残されているそうです。

その頃は、文箱・衣装入れ・小物入れとしてごく一部の upper 階級の人々だけに使われていました。

江戸時代になると、大名から町人まで広く使われるようになりました。

行李の種類も、鎧櫃（よろいびつ）、陣笠（じんがさ）などは、武士が使い。小間物行李（＝小間物を行商する時）、薬屋行李（＝越中富山の薬売りが有名）、帖行李、などは、商人や一般の人々が使います。

裱（かみしも）行李、長尺（＝衣類の保管）など、目的に応じた形ものが作られました。

行李は、大名の参勤交代、商人の商い、庶民のお伊勢参りなどの時に、旅行道具入れとして使われました。

明治時代には、手にさげて歩くこうりカバンとして、大正時代にはバスケットとして、昭和時代には、戦時中は軍用行李や飯行李、戦後は買物籠としてたくさん作られ、その他にもいろいろな種類の物が作られて、人々の生活の中に入り込んで現在に至ります。

飯行李は、「軽くて、じょうぶ。ごはんにやさしい、しなやかな弁当箱」で通気性が良く、登山や釣り、ハイキングなど野外でのお弁当に最適です。